

わが国における子守服の変遷とその背景にある子育て観の変化に関する研究

Research on the changes in utensils for and prevailing opinion of child-rearing in Japan

阿部和子¹, 柴崎正行¹, 阿部栄子¹, 是澤博昭¹, 坪井 瞳², 加藤紫識³

¹家政学部, ²浦和大学 こども学部, ³千代田区立日比谷図書文化館 (文化財調査指導員)

キーワード: 子守服, だっこ (紐), おんぶ (紐), ベビーカー

1. 研究目的

近年, 乳児を抱くことやおんぶすることが減少しつつある。その背景にベビーカーに乗せて移動することやスリングなどの流行があると思われる。育児の負担感の軽減やファッション性を重視した結果が, こうした流行を生み出している一因ともいえる。その一方で, わが国の絵画に描かれた子守の仕方や子守服を分析した研究によると, もともとは背中におんぶすることで, 親は両手を使用することが可能になり, 育児をしながらの仕事ができたとも言われている。

本研究は, 子育てにおける乳児のおんぶや抱っこに焦点を当てて, わが国においてはどのような紐や服を用いて子守をしていたのか, そして仕事と子育ての両立を可能にした便利な子守紐や子守服はいつ頃からどのような過程を経て現在のような製品へと変化してきたのかという点を, 絵画や写真, インタビューなどを通して検討する。また, その変化の過程にはどのような子育て観の変化が存在していたのかを検討する。

わが国の子ども史を見ると, 児童文化史, 産育史, 育児書の歴史等では研究が進んでいるが, 日常の子育てにおける乳児のおんぶや抱っこという子守りに関連することは不明な部分が多い。本研究では, 子育てを保育学, 教育学, 被服学, 社会学, 民俗学の分野を融合させ, 乳幼児の生活に学際的なアプローチを試みる。

本研究で得られる成果は, 乳幼児の周囲にある物の変化の履歴を多角的に捉えることで, 関係的な視点からの子ども理解につながり, 貴重な家政学の基礎資料となるものと考えられる。また, 家政学部における「生活」をキーワードとする科目に基礎的な材料を提供することが可能と考える。さら

に, 子育て支援の重要性が言われる昨今, 地域の子育て家庭への子育て相談に関する資料ともなりうる。

2. 活動実施報告

平成 23 年度 (以下, 本年度) の活動として下記の調査・研究を実施した。

- (1) 子守に関わる絵画や写真, および文献, 論文等の資料収集
- (2) 子守帯メーカー (アプリカ) へのインタビューを実施。その成果に基づいて子守紐の商品化とその時代背景に関する調査・研究
- (3) 子守服 (子守帯・ねんねこ半纏・授乳服など) の構造分析, および子守帯の実物作製による機能理解とその変遷に関する調査・研究
- (4) 日本におけるベビーカー (乳母車) の導入・定着の歴史的背景, およびその機能の変遷に関する調査・研究
- (5) おんぶや抱っこが描かれた, 文献・浮世絵・挿絵の分析と子育て観に関する調査・研究
- (6) 民俗学的視点による「村落」と「都市」の子守方法, および子育て観の変容に関する調査・研究
- (7) 地域博物館における子守・産育資料の残存率とその活用に関する調査・研究

3. 研究目標の達成状況

本研究は, 基礎的研究期間として 3 年を計画しており, 本年度はその 2 年目にあたる。昨年度に引き続いて資料収集と実物資料の所在確認を継続しながら各分野に分かれて以下の調査を実施した。

昨年度に引き続き、おんぶや抱っこが描かれている錦絵・挿絵・写真の資料調査・収集を行った。本年度は特に明治期に刊行された雑誌『風俗画報』から、おんぶや抱っこ、子守りに関わる記事・挿絵を抽出し、情報を整理した。ここで収集した視覚資料は、今後活用できるようにデータベース化することも視野に入れている。

さらに、地域博物館などに対して、おんぶ紐やベビーカーなどの実物資料の所蔵確認を行った。本年度は、田中本家博物館（長野県）、京都府京都文化博物館、京都府歴史博物館、京都大学総合博物館などで所在調査を行なった。京都についても東京と同様に都心部における子守に関する資料の残存率が低いことが明らかとなり、来年度の調査では、東北方面の地域博物館での調査を予定している。

また、おんぶ紐の実物製作の継続とともに、昭和 23 年の中学校教科書『被服』に記載された「背負い紐」「背負いふとん」などの構造分析、さらにこのような子守用具が教科書に記載された社会背景も注目した。

子守帯・ベビーカーメーカーへのインタビューを昨年度に引き続き実施した。メーカー側が各時代の子育てに対するニーズをどのように形（商品）にしたのかを戦後の社会の変化と合わせて分析することで、1970 年代（おんぶ紐からベビーカーへの移行、子守帯に関してはおんぶから前抱っこへの移行）が、商品化されて以降の子育て観のターニングポイントであることが理解できた。おんぶ紐・ベビーカーなどのモノを通して子育て観の変遷を検討することの可能性を明らかにすることができた。

以上、本年度は、資料収集とともに実地調査や資料を用いた調査の整理と若干の分析が行われ、2 年目の計画はおおむね達成した。

4. まとめと今後の課題

本プロジェクトでは、子守服・子守帯・ベビーカーなどのモノを通して、それらの変遷とその背景にある子育て観の変化を捉えようとするものである。それとともに、だっこやおんぶがどのようなシチュエーションでなされ、それぞれの子守用具がどのような時に必要とされたのかという点も明らかにしていく必要がある。つまり、その作業やシチュエーションの多様化・需要に応じて、子守のスタイルや価値観が変化し、子守用具の普及・発展につながっていると考えるからである。

たとえば、姉が弟を背負って学校に通っているのであれば、その土地の教育普及との関連を探ることが必要になる。また、若い母親が乳児を背負って労働しているという一つの現象を取っても、農作業であるのか、店先、工場での作業であるのかなど、その地の産業や時代とどのように関係しているのかを踏まえることが必要になる。具体的な時空のなかの現象とその背景に焦点を当てることで、それぞれの時代を生きる人々の暮らしのなかで紡ぎだされたモノに子育て観が凝縮されていることが明らかになるだろう。このような生活の履歴のなかで、子守帯やベビーカー等の育児用品がどのように商品化されていったか、それらはどのような時代のニーズの何を反映しての育児用品であるのかなど、創り出されたモノそのもの、また、作り出されたモノの使用の変遷を通して、子育て観の変化を捉えることが今後の課題となる。したがって、来年度は、以下の 2 点を通して、本研究の目的である子育て用品（子守服・子守帯・ベビーカー）に込められた子育て観の変遷を明らかにしていく。

- ① 実物資料や製品の構造分析や機能的側面の変遷の整理と分析・考察
- ② 社会的背景や地域的環境のなかでの子守服や子守用品の変遷の整理と分析・考察



写真 1
昭和 50 年代のネンネ
コ半纏の構造分析



写真 2
構造分析のために
作製したおんぶ紐